

令和5年度医学部医学科白衣着衣式挙行

令和6年1月9日(火)、講義棟C第3講義室において、令和5年度医学部医学科白衣着衣式を執り行いました。

本式典は医学生共用試験に合格した4年生に医学生としての決意と自覚を促すことを目的に毎年実施しているものです。

はじめに篠田晃医学部長の訓辞があり、医学でも医療でも周りの人たちの心を動かすような仕事を期待していると話されました。続いて112名の学生の代表として、吉村美賀子さんが医学生共用試験合格証および臨床実習生(医学)証を授与されました。

福田進太郎霜仁会会長の挨拶のあと、同会から授与された白衣を学生全員が着衣しました。吉村美賀子さんからは式典開催に対する謝辞と、白衣に袖を通すことで改めて医学を志す者としての自覚を持つとともに、自らの生涯を医学の発展と人類への奉仕に捧げることを誓う旨の宣誓がありました。

医学部附属病院の松永和人病院長からは①頑張りぬいた自分をほめる②初心を思い返し、理想の医師像をもう一度考えてみる③両親に感謝を伝えるといった3つの言葉が贈られ、期待を込めた挨拶が述べられました。

医学科4年生は1月から同院において、指導医の下、臨床実習を行います。



山口大学医学部
医学科後援会
会報 R6.1
Vol.17



**Yamaguchi University
School of Medicine**

- 特集1 ゲノム・機能分子解析学講座／細菌と共に歩む新時代を拓く微生物学をめざして
- 特集2 臨床神経学講座／なおる脳神経内科を目指して
- 特集3 病態制御内科学講座／Generalな視点と科学的・専門的な視点を兼ね備えた
内科医の育成を目指す

今年度の学生自治会・サークル活動報告／第78回医学祭の開催について
トピックス 令和5年度 白衣着衣式

ご挨拶

山口大学医学部医学科後援会会長

石原 得博



3年以上に亘って猛威を振るった新型コロナ感染症も5類相当となり、感染者も激減しました。コロナ時代には世の中は大きく変わりました。学会が現地に行かなくて、WEBで参加できるようになりました。非常に効率的になりました。学校の授業でさえも、オンラインで行われました。小学2年生の孫がタブレットPCを十分使いこなしています。これらのIT関連を含みAI技術が急速に進歩しました。その反面、若い人のコミュニケーション能力の低下を危惧しています。私は40年前にアメリカのNIHに留学しました。電子顕微鏡を用いた研究が主でしたので、1週間のうち6日間は研究室の電子顕微鏡の部屋で1日中、1人で研究をしていました。約2年間はバスや秘書以外の外人さんとはほとんど話をしませんでした。その結果、2年間留学したにも関わらず、英会話はほとんどできませんでした。恥ずかしい経験を明かしたのは、学生諸君にヒトとの対面での交流が如何に大切であるかを強調したいのです。臨床医師は患者さんとの対面での診察が大切だと考えます。OSCE(オス

キー:客観的臨床能力試験)が医師国家試験並みに重要となっていました。オンライン診療が進歩しても、原則は対面診療です。

新型コロナ感染症が落ち着き、学生諸君の生活も元に戻り、部活をはじめ、いろいろな行事が復活したと思います。医学祭も無事終了しました。

進級や卒業試験の厳しさはコロナとは関係ありません。気を抜かずには頑張りましょう。皆さんは医学という崇高な職業を選択したのですから一生勉強です。

卒業生の同窓会である霜仁会や山口県医師会(現加藤智栄会長は皆さんの先輩です)からもいろいろな角度から援助を受けています。

後援会としても、山口大学に入学して良かったと思えるように、家庭と緊密な連絡をとりながら学生の福利厚生の手助けができればと思います。

教職員および保護者の皆さん宜しくお願いします。

新年のご挨拶

医学部長
篠田 晃



新年明けましておめでとうございます。

今年のお正月はいかがお過ごしになられましたか。寒暖差の激しい年末年始でしたが、比較的穏やかな日和であったように感じております。一方、元旦に起こった「令和6年能登半島地震」は、震度7を記録し、津波や火災の発生、交通網の寸断も相まって、死者も怪我人も多数出ており、住民生活や公共機関に甚大な被害が及んでいます。能登半島・北陸日本海沿岸部の医療施設や医療関係者の方々には、年始早々から大変なご苦労をなさっていることと心配しております。被災された皆様には心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。またコロナ感染症についても今なお散発的クラスターが散見されますが、こちらはひと頃の様なコロナ狂想曲は終息に近づき、漸く日常生活に活気が戻り始め喜ばしく思っております。今までコロナ禍で附属病院での実習や学外の病院・施設での実習が十分行えない状況がありましたが、漸く本来の姿に近づき患者様と近接して寄り添う機会も多くなりつつあることに安堵しております。本来、医学教育で重要視すべき臨床実習、実践研究参加型教育、対人スキルの向上、授業や課外活動を介在した絆形成等で、やはり対面教育が基本であると痛感させられた4年間であります。

最近の山口大学の医学部では、外科教育強化を図るために2年生から基本臨床外科手技の早期教育を開始しております。また卒後医師のリカレント教育として、特に若手医師の手術手技向上と外科手技開発を目指して、学生も参加したご遺体を活用した臨

床外科研修(CCST)を始め、昨年度は県内から250名超の若手医師の参加がありました。互いの絆が強化され数多くの腕のいい外科医が輩出されて、多くの患者さんが来院し、卒業生も率先して山口大学での研修を望み、他県から多くの優秀な若手医師が集まる理想を描いております。そして研究心育成とアカデミア親和性の強化も重要で、コロナで一時休止状態だった自己開発コース海外留学プログラムも復活の兆しが見え始めました。学生の実践研究参加型教育は、将来に向けて種蒔きをする意味では重要な事と考えます。また一昨年から再開した学生の医学祭と教員の山口医学会、医学部OBが集うホームカミングデーの「ホームカミングYUMEフェスティバル」は、今年は特に一般市民の参加も目立ち、学術とエンターテイメントの融合祭として大いに盛り上がりました。また昨年末には山口東京理科大薬学部と多職種連携教育プログラムを共有する調印を果たしました。医師・薬剤師・看護師・臨床検査技師のチーム医療を強化すべく、学部学生時代から互いの役割と責務を意識してリスペクトし合える関係を構築すること、各々卒業生が県内チーム医療に親和性を持って働いていただこうことを願う次第です。

2024年の干支は「甲辰」。「甲」は木の兄(陽)で急成長・発展・春の象徴です。「辰」は本来「蜃」に通じ「蛤が足のように唇を出して振動しながら殻を破って立つ状態」を指し、秦代に「辰」は「立ち登り天に飛翔する龍」になりました。今年が、皆様の努力が認められ、殻を破って一気に開花する年となることを祈念いたします。

令和4年度 理事会報告

書面審議(令和5年8月7日~8月18日)

■令和4年度事業報告

令和4年度の実施事業について、主なものを紹介します。

1. クラブ活動に関する事業

- (1) クラブ活動及び自治会活動への助成
- (2) 課外活動運営補助
- (3) キャンパス間移動用バス運行補助
クラブ活動に参加する1年生送迎(吉田キャンパス ⇄ 医学部キャンパス)のために、バス借上げ費用の一部を補助

※各クラブの先輩が後輩を車で送迎することが常態化による事故等の危険性を防ぐため、平成24年度から、学生自治会及び利用する部活動からの負担金、医学科後援会及び保健学科後援会からの補助により送迎バスの運行を継続して実施しています。

実施期間: 令和4年6月~令和5年2月 運航日数 116日

運行方法: 大型バス又は小型バス
週5日(平日)運行、1日1往復
吉田キャンバス発: 月~金曜日 18時00分
医学部キャンバス発: 月~金曜日 22時30分

2. 医学祭の運営に関する事業

3. 医学教育に関する事業

- (1) 医学部生特別講演会の開催
講座主催による学生向け講演会を実施(4講座分)
 - ①神経解剖学講座
「社会におけるアートの役割」
開催日時: 令和4年12月9日(金) 13:00~14:35
 - ②分子細胞学講座
「ゲノム編集技術の医学・医療への応用」
開催日時: 令和4年12月13日(火) 13:00~14:35
- (2) 医学教育に係るFD助成
- (3) 臨床実習への補助
- (4) ワクチン接種経費の補助: 臨床実習開始前のワクチン接種費用
自己負担軽減のための助成
- (5) 医師国家試験対策への補助: 模擬試験料の補助
- (6) 高度学術医育成のための奨学金助成
※該当者がないため実績なし

4. 正常解剖体蒐集に関する事業

5. 入学卒業の運営に関する事業

- (1) 大学入学共通テスト及び個別学力試験の補助

6. 保護者会運営に関する事業

- (1) 4年生保護者見学会(白衣着衣式)開催経費補助

■令和5年度事業計画

令和5年度に継続して同様に事業を実施します。

- 1. クラブ活動に関する事業
- 2. 医学祭の運営に関する事業
- 3. 医学教育に関する事業
- 4. 正常解剖体蒐集に関する事業
- 5. 入学卒業の運営に関する事業
- 6. 保護者会運営に関する事業

■医師国家試験受験状況

発表日	新卒者			既卒者			合計		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
第115回(R3.3.16)	115	113	98.3%	11	5	45.5%	126	118	93.7%
第116回(R4.3.16)	107	102	95.3%	6	2	33.3%	113	104	92.0%
第117回(R5.3.16)	128	124	96.9%	10	3	30.0%	138	127	92.0%

■令和5年度 役員のご紹介

役員名	氏名	現職
会長	石原 得博	山口大学名誉教授
副会長	黒川 典枝	霜仁会副会長
顧問	篠田 晃	医学部長
	阿賀 康弘	
	繩田 修吾	
	中村 直樹	
	中村 伸一	
	夏山 文太	
	林 雅太郎	
	花村 泰成	
	藤井 慎一	
	若佐 裕治	
	東 良和	
	若松 弘也	(新任)
	田村 博史	(新任)
	松永 和人	病院長
	浅井 義之	教授(学生委員長)
	白石 晃司	教授(副学生委員長)
	石原 秀行	教授(教務委員長)
	玉田 耕治	教授(副教務委員長)
	白澤 宏幸	霜仁会理事
監事(保護者)	夏山 文太	
監事(医学科関係)	中村 和行	山口大学名誉教授

高度学術医育成のための奨学金

平成22年度から、文部科学省の特に社会的要請が強い分野の研究医を養成する施策に対応し、大学院への進学を奨励し将来の研究医を養成する目的で「高度学術医育成コース」を医学科に設置しています。

本コースには、高度学術医育成特別プログラム(SCEAプログラム)と高度学術医育成一般プログラム(AMRAプログラム)をもち、学部・大学院教育の一貫システムとして4年生から大学院授業の先取り受講や研究活動を開始することができます。

高度学術医育成特別プログラム(SCEAプログラム)は、履修者のうち年間2名に月額5万円の奨学金制度が用意されおり、法医学を中心とする基礎系分野へ進路選択を行った場合には返還が免除されます。

細菌と共に歩む新時代を拓く 微生物学をめざして

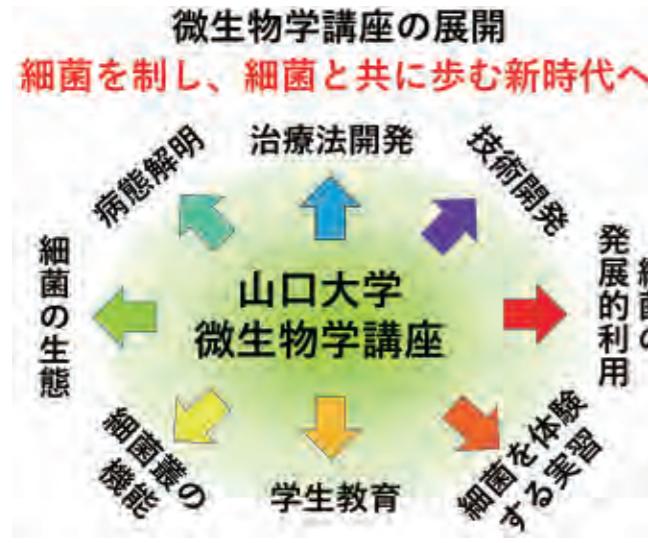
山口大学大学院医学系研究科
ゲノム・機能分子解析学講座
教授

坂本 啓



や生態系には多様な微生物から構成される微生物叢が存在し、それは単純に生物が混在した状態ではなく、明らかに機能を持った存在として解釈されるようになってきました。共生微生物は宿主の健康状態や、以前は微生物とは無関係と考えられてきた領域の疾患の治療成績等までも左右することが明らかになってきています。このような新しい視点からの微生物像も教育に取り入れて行く方針です。

微生物学は近年色々と注目を浴びるようになっております。例えば新型コロナウイルスのパンデミック、インフルエンザウイルス感染症の流行、梅毒の増加、薬剤耐性菌など、感染症の話題をニュースで見ない日は有りません。また、医師として臨床の場に立つ際には、初日から感染症関連の問題に遭遇するといつても過言ではありません。微生物学はそのような感染症に立ち向かうために不可欠の学問です。当講座は基盤系（基礎系）の講義を担当しますが、学生が展開系（臨床系）の講義や実習へとスムーズに移行し、やがては臨床で知識を活かせるよう、感染症という観点を特に大切にした教育を行う方針です。また、感染症分野だけではなく、微生物は生物や生態系を支えるシステムを形成するという点でも注目を浴びつつあります。生物



一方で、微生物に纏わる話題は暗いものばかりではありません。微生物を制御することにより、これまで不治の病とされてきた難病の治療にも光が見えてきました。細菌や細菌叢が宿主に及ぼす影響が解明されつつあり、今やそれらの微生物を利用することで様々な疾患を治療する時代に突入しました。当講座は「細菌が宿主や細菌叢という環境に進出するにあたり、それをどのように改造するか?」という観点からも研究を進めております。

当講座は微生物からの干渉に対して防戦一方だった状況を打破し、微生物を先回りし、微生物を制し、微生物とともに歩む新時代を目指して研究に邁進して参ります。会員の皆様には、ご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

なおる脳神経内科を目指して

山口大学大学院医学系研究科
臨床神経学講座
教授

中森 雅之



令和5年1月1日付で山口大学大学院医学系研究科ゲノム・機能分子解析学講座（微生物学講座）の教授を拝命致しました坂本啓と申します。会員の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

われわれが担当しております脳神経内科の領域は、脳血管障害や頭痛、てんかんなど、頻度の高い疾患から、まれな難治性神経筋疾患まで、幅広い領域をカバーしております。ひと昔前までは、脳神経内科は「治らない」病気を診る科として認識されておりましたが、最近の医療技術や研究の進歩により、非常に効果の高い治療法がどんどん開発されてきております。以前であればなすすべなく重篤な後遺症を残していた脳梗塞でも、急性期の血栓回収療法が奏功すればほぼ元通りの状態にまで回復しますし、片頭痛やてんかんなどにも画期的な新薬が続々と開発されております。認知症の主たる原因の一つであるアルツハイマー病についても、レカネマブという新薬が上市されたのも記憶に新しいところです。神経変性疾患の代表格であるパーキンソン病も、現在は30種を超える内服薬が使えるほか、脳深部刺激療法、集束超音波治療などの選択肢も増えております。さらに多発性硬化症や重症筋無力症などの神経免疫疾患でも、さまざまな分子標的薬が開発され、格段に予後が改善しております。ほかにも、従来根本的治療が不可能と考えられていたハンチントン病や筋ジストロフィーなどの遺伝性神経筋疾患や、難病中の難病といわれる筋萎縮性側索硬化症についても、人工核酸をもちいた核酸医薬が臨床応用されつつあり、今後治療の幅がさらに拡がることが期待できます。

われわれの臨床神経学講座は、私の着任前から高いレベルの脳神経内科診療をおこなっており、特に神経免疫疾患や末梢神経疾患の診療では日本でトップクラスの実績をあげております。今後もこうした伝統を活かし、脳神経内科疾患に対して正しい診断のもと最適な治療を実践できるよう、教室一丸となり、県内の先生方と連携して、より一層診療の充実を目指していきたいと考えております。また研究面でも、末梢神経疾患や神経免疫疾患について質の高い臨床研究を行っているほか、血液脳関門（BBB）研究では世界をリードする成果を上げております。これからもこれらの分野で世界に通用する研究を推進していくほか、私が長年取り組んでおります、難治性神経筋疾患に対する新規治療法の開発にも精力的に取り組んで参りたいと思います。会員の皆様方におかれましては引き続きご指導ご鞭撻のほど、なにぞよろしくお願い申し上げます。



Generalな視点と科学的・専門的な視点を兼ね備えた内科医の育成を目指す

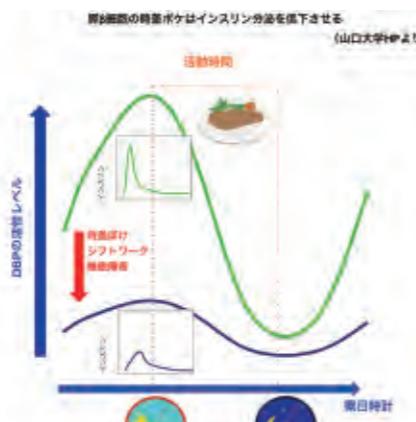
令和5年6月1日付で山口大学大学院医学系研究科病態制御内科学講座教授ならびに附属病院第三内科長を拝命いたしました太田康晴と申します。医学科後援会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

当講座は第一内科、第二内科よりも少し後になって開講した内科の講座であり、令和5年6月に56周年を迎えました。臨床病理学講座が母体となっていますので、発足当時は血液疾患が主たる診療分野であり、1983年に西日本で初めての同種造血幹細胞移植（一般的にいう骨髄移植）を成功させた医療機関であります。現在でも県内で同種移植を行なっている唯一の医療機関で、現在の新病棟には16床の無菌病床があります。第3代の故兼子俊男教授が糖尿病を専門分野とされていましたので、兼子教授就任以降は、血液疾患に加えて糖尿病・内分泌代謝疾患も当講座の主要な診療領域となりました。どちらの領域の疾患も、全身に影響が及ぶ疾患であり、常に全身を丹念に診ていく必要があります。現在の医療の流れとして、専門分野がますます細分化していくと同時に、その一方で全身状態をしっかりと診ることができます。その管理ができる医師も必要とされています。当講座はまさにそのような医師の育成にも貢献している存在としても重要な立ち位置にいると考えています。また当講座では、開講当初から基礎的研究が精力的に継続されており、その経験やそこから見出された知見を診療に活かすという伝統があります。研究的な視野を持った臨床医を意味する“Physician Scientist”という言葉がありますが、当講座はまさにその言葉にふさわしい素晴らしいドクターを数多く輩出してきました。現在、山口大学学長の谷澤幸生先生もそのお一人です。谷澤先生は、糖尿病を主徴の一つとする難病であるWolfram症候群の原因遺伝子がWFS1であることを発見されました。現在では、WFS1はコモンな糖尿病の原因にもなっていることがわかっています。現在、当講座



山口大学大学院医学系研究科
病態制御内科学講座
教授

太田 康晴



では環境因子と糖尿病との関連性を見出すべく、体内時計と糖尿病の関係性に関する研究を主たるプロジェクトの一つとして進めております。血液学の分野では、分子標的薬が次から次へと開発され、CAR-T治療など最新の免疫療法も実臨床に既に導入されています。そのような観点から、当講座の診療をしていく上で分子生物学的な知識や経験が不可欠になってきていると思われます。当講座の若い先生には、たとえ短い期間であっても基礎研究に没頭してもらい、将来、その経験を活かしてほしいと思っています。

糖尿病はcommon diseaseの一つであり、患者数はとても多く、専門医だけではとても全ての患者さんを診られるわけではありません。専門医は山口県のリーダーとなり、専門医でない多くの先生や医療スタッフの皆様にもご協力いただきながらこの分野の地域医療を推進していくことが求められています。血液疾患は糖尿病に比べると患者数は少ないですが、専門施設でないと診療が難しい疾患がほとんどです。地域の先生に血液疾患が疑われれば気軽にご紹介いただけるような体制づくりを目指しています。

最後になりますが、医学科後援会の皆様のますますのご活躍を祈念するとともに、引き続き、当講座の診療や研究にご理解・ご協力を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

今年度の学生自治会・部活動の活動報告

山口大学医学部
学生自治会会長
医学科4年

筋田 夏帆



本年度、山口大学医学部学生自治会で会長を務めさせて頂いております、医学科4年の筋田夏帆と申します。

学生自治会とは、山口大学医学部に所属する全ての医学生により構成される組織で、活動は多岐に渡り、山口大学医学部で学ぶ学生全体との関わりをもちます。具体的には、新入生のサポート、学生主体の組織・団体（部活動やサークル）の統括、医学教育や学内設備に関する先生方や学務課との懇談、カリキュラム委員会・美化委員会を始めとした各種委員会の補助等です。

本年度の活動につきまして、まず新入生歓迎行事は、感染症対策に十分配慮した上で対面で行いました。部活動の勧誘だけではなく、新入生と上級生が交流できる貴重な場となりました。

7月には、自治会メンバーで地域医療探求セミナーに参加しました。医師を志す山口県の高校生を対象として、山口大学医学部を案内し、学生生活についてや受験の体験談を話したりと、県内の高校生と交流を行いました。

課外活動では、本年度は西日本医学生総合体育大会が3年ぶりに開催されました。その中で、水泳部男子4×100mメドレーリレー3位、4×50mフリーリレー優勝、100mバタフライ優勝、200mバタフライ準優勝、柔道

部団体戦準優勝、個人戦軽量級準優勝、男子バレーボール部優勝という素晴らしい成績を収めております。加えて、その他多くの部活で中四国大会、九州山口大会での功績を聞いております。また学生の中には、山口県産の農産品からくる創薬プロジェクトにおいて、「宇都市SDGs私たちの未来共創補助金」に採択された学生団体もあり、様々な分野での活躍が見られた1年でした。

課外活動を行う際に毎年問題になるのが山口市→宇部市間を1年生が移動するためのバスについてです。近年のバス代高騰に伴い課外活動の予算を圧迫する状況が続いておりますが、今年度もバス運行を無事に行なうことができました。バス運行を続けられることは医学部後援会からの助成をはじめ、山口大学医学部に関わってくださる様々な方のご支援、ご協力のおかげだと感じております。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

大会やコンクールなど、コロナ以前と同様に行われるようになり、学生も日々の活動により熱が入っているように感じております。今後も勉学、課外活動共に熱心に取り組んでいきたいと思っておりますので、今後とも、山口大学医学部、並びに学生自治会をよろしくお願い致します。



第78回医学祭の開催について 三位医体 ～溢れるeYUMEを～

山口大学医学祭実行委員会
委員長
医学科4年

足立 大地



第78回医学祭は10月6日から8日まで3日間にわたって開催されました。本年度の医学祭のテーマは医学科、看護専攻、検査専攻の3つが1つになれるよう「三位医体～溢れるeYUMEを～」とさせていただきました。また本年度も医学祭は医学会との合同開催とさせていただきました。準備に苦労することも多く、たくさんの方にご協力いただき成功を治めることができました。お力添え、ご指導いただきました皆様誠にありがとうございました。また医学祭にご支援いただきました皆様、誠にありがとうございました。

6日の前夜祭では部活動別に1年生によるダンスコンテストが行われました。多くの1年生に参加いただき医学祭を楽しんでいただけたと同時に医学祭へ関心を持っていただくことができたと思います。7日の本祭初日には学生によるボディビル大会や制服コンテストなど新たな企画が行われ大変盛り上がりました。またアーティストのNovelbrightによるライブも行われました。学生や関係者、地域の方々など総勢1000人を超えるお客様で大盛況でした。

8日には毎年恒例bingo大会やお笑い芸人ハリウッドザコシショウと野田ちゃんによるライブが行われました。学生以外の多くの方にご来場いただき大変うれしく思います。

医学祭はステージ企画のみでなくドクターへりの展示会や学生による研究発表も行っております。小さなお子様がドクターへりの展示会の予約の列に並んで楽しみそにはしゃいでいたのが、実行委員会一同とも微笑ましかったです。また学生の研究体験会では石鹼作り体験会を行

いました。子供たちが1から好きな色の石鹼を自分で作ることで、学問や実験の楽しさを知っていただける良い機会となりました。他にも多くの企画が行われましたがすべて大成功を治めることができました。

最後に、伝統ある山口大学医学祭の実行委員長を務めさせていただきありがとうございました。準備から本番まで何度も壁に当たることがあり、お叱りの言葉やご指導、ご協力をたくさんいただきました。すべてが人生においてかけがえのない経験となりました。医学祭に携わっていただいたすべての皆様に熱く御礼申し上げます。ありがとうございました。

